

「関」一句鑑賞

守屋 明俊

(五十音順)

白じろと一反もめんの焚火かな

阿部 草薫

一反もめんは水木しげるの「ゲゲゲの鬼太郎」に出てくる真白く長い木綿様の妖怪である。この句では、当たっている焚火の炎が一反もめんの形をし、白じろと立ち昇っていると詠む。「白じろと」と把握した個性。

息白しふしぎふしぎと吹き吹く子

伊澤やすゑ

赤子が少し成長し、自分の口から出る息の白さに気付いた。息をしているなんてことはもちろん知らず、只々その白い息を不思議がり、何回も息を吹いて面白がる。それを「吹く子かな」ではなく「吹き吹く子」と詠んだ。「吹き吹く子」の措辞により、赤子の可愛い様子が増幅して見えて来る。言葉を大切にしている人の句である。

安寧を希ふ歩や枯野中

市村 啓子

今回の作品には「穏やかを祈ぎ」「笑門来福」などの言葉が散見する。この句もまた、安寧をこいねがつているが、その歩んでいるのが枯野の中という。勿論、この枯野は自身の人生における枯野でもある。万象枯れるそ

の野をひたすら歩く心細さに処すには、ひたすら安寧を祈るしかないのだろう。「枯野中」が重く、切ない。

かき回すリトルルキー福笑 牛込はる子

リトルルキーは、生まれたばかりの子で、将来活躍することが期待されている子。希望の星。そのように理解した。その子が何と福笑いの顔を手でかき回し、その顔を粉々に飛ばしてしまった、天使の顔で。可笑しい。

誤字脱字などは茶飯事卒業す 内海 範子

よく学んだのだろうが、なかなか身に付かず誤字脱字などは日常茶飯事。それでも大目に見てもらい卒業できたのだから大したもの。俳句でも、字が解らない時は辞書を引く。季語が解らなければ俳句歳時記を引こう。

春待つや雨で幸ひ病弱者 大下 壽櫻

ご自身のことを詠んでいる。陽春の日差しに待ち焦がれながらも、雨が降っている方が病弱の体にはいいのだろうか、「雨で幸ひ」と言っている。健康者には解らない体調を「雨で幸ひ病弱者」で言い留め、確り伝えている。

均したる枕のくぼみ初明り 太田 裕子

初明りに肅々と目覚めたその朝。枕の凹みに気づいた

ほど頭は冴え、その凹みを訝しげに眺め、そして均した。毎晩使う枕であるが、くぼんでいるのを意識したのは、新しい年を健康で迎えたいとの思いからだろう。無意識に枕を均したのも、未知なる一年への深い祈りによるもの。全ては、あらたまの為せる業。淑気を感じる一句。

餅好きは父似中華の餡をかけ 大和田いそ子

作者の住む愛媛でも、餅はいろいろの食べ方があるのだらう。餅の中華餡かけは、想像だが、加熱した切り餅を包むように、水溶き片栗粉を回し入れた熱々の具材(豚肉・野菜など)を盛り付ける。見るからに美味しそう。父に似て餅が好きとのこと。もはや餅の中華餡かけは、大和田家の伝統料理の一品になっているのでしょう。

風花す旅立ちちかき父とゐる 小野 直美

この句の前に〈凍星や命の秒読みはじまりぬ〉の緊迫した句があるので、「旅立ち」はそのように受け止めた。山を越えて舞ってくる風花に、今まさに旅立とうとしている父への思いが滲む。「父とゐる」の強い思いに圧倒された。尊い命に向き合う一句である。

水仙や海を遠くに夫の墓 金子かほる

海辺に建つ夫君の墓。その辺りには水仙が楚々として

咲いている。そして、墓と水仙の向うには青い海が果てしなく続くと、この句は語っている。「海を遠くに」で、夫追悼の美しい一句に仕上がった。

父と観し箱根駅伝一人観る 金田 知子

今まで季語ではなかった箱根駅伝が、どういう経緯か知らないが、新年の季語に仲間入りしたのは喜ばしいこと。この句では亡き父上を追想しつつ、現在は箱根駅伝を一人で観ている。嘆いているわけではない。時の流れの早さ。その現実を直視している作者がこの句にいる。

七草や土鍋に残る草匂ひ 金田 喜子

七草粥なのだろう、食べ終えてなお土鍋に残るその草の匂いに思い浸っている。七草粥は人日に食べる七草の祝食。芽を出したばかりの若草を粥に入れ、神と共に食べることで新しい生命力を身に付ける。そういう願いが、この七草粥には籠められている。「土鍋に残る草匂ひ」からもそれは感じられる。

一万歩枯葉一万踏み尽くす 北 好夫

一日に一万歩を達成した作者。枯れた落葉の道をずつと歩いたので、結局その一万歩は枯葉を一万枚踏んだことになる。その達成感が「踏み尽くす」に表れている。

白粥をいのちの粥と覚えたり 木山 有衣

米をふかしたものが飯で、煮たものが粥。粥は「じゅく」と読み、それが祝（しゅく）に通じるので目出度いのだと、楠本憲吉が書いている。この粥は本来白粥で、具を入れず塩も加えなかった。淡泊この上もない味で、「いのちの粥と覚えたり」とは、よくぞ申した。〈骨の上に春滴るや粥の味 夏目漱石〉

過去といふ低音やけど霜を踏む 久保田勝一

自分の過去を一時の「火傷」に喩えるのは容易い。そこへいくと、この句のように低音火傷のようだと言われてみると、その過去の様子がもう少し微妙で繊細な感じもしてくるから不思議である。低音火傷は「比較的温度の低い暖房器具などに長時間接触して起こる火傷」と定義されている。目立たず長い間気付かないでいるうちにじわじわと進行する火傷は、もはや取り返しをつかない過去の様。作者はうまいことを言った。「霜を踏む」に、忸怩たる現在の心境がしみじみと表現されている。

落し物届け徳積む初詣 栗原 季星

初詣に出掛けた折、作者はそこで落し物を拾ったという。直ぐにそれを届け出たそうで、これは善行というべきものである。まさに「徳積む」。この心掛けが一年を

明るくしてくれる。そういう晴れ晴れとした一句。

寒くない大寒地球は火の車 小唄あゆみ

大寒は必ずしもその名のとおりの大寒さになるとは限らない。昔のような極端な寒さは東京でも稀で、暖冬という言葉は随分前から用いられている。そこへ来て、気候変動。この先どうなるのか。今夏も暑いという。火の車は地獄で罪人が乗せられる猛火の燃えている車で、悪業のある者を、死ぬ前に迎えに来るといふ。故にこの句、火の車である地球に乗っている者は悪業の人類である。

寒林ゆく孤高の人のやうにゆく 小泉まり子

落葉樹が葉を落としてしまった、寒むぎむとした冬の林が寒林。そこへ深く入り込むにつれ、雑念も消え孤高の人のような超然とした心境に作者はなつたのだろう。決して寂しいわけではない。〈寒林を馳せれば息新しき 細見綾子〉

のつそりと猫が見に来る福笑ひ 幸喜美恵子

作者にはもう一句〈吾輩は鯛焼好きな猫である〉がある。鯛焼は兎も角、福笑には興味の無きような猫だが、一応、のつそりと見に来た。見てからふいと引き返していく様も面白く想像できよう。

きしめんの味噌鍋焼や「でえらうみやあー」 小濱けえ子

きしめんは平打ちのうどんで、名古屋の名産。その味噌鍋焼なので作者も美味しく載っている。名古屋で食べたのだろうか、地元の人で「でえらうみやあー」の言葉が強く印象に残ったようで、それをそのまま句に仕立てている。記念の一句。

句の出来をよすがに張りぬ老の春 小林ゆきお

俳句に精進されている様子が窺える句である。へ余寒なほ投函前に二度キッスするくらい、俳句によって心を奮い起している。「老の春」は初春をめぐる言葉。互いに張りのある老の春でありますよう。

この先は薄氷を踏むゲームとも 小林 玲

自分の余生のこととも、過ちを繰り返してきた人の世のこととも思える薄氷。過去から現在、そして「この先」までも薄氷は破滅を包含して私たちの足下にある。踏むか踏まないか、これはゲームではない。でもゲームとも思えるのがとても悲しい。弱者はいつも弄ばれている。

軒下の「音がする砂利」年の暮 佐藤 和子

「音がする砂利」は防犯砂利。その撒いた砂利の上を歩くと大きな音が鳴り、空き巣などの存在を知らせてく

れる由。その音量は蟬の鳴き声を間近で聴いているのと同じレベルとのことで、この句では、これを侵入経路に撒き、年の暮を安心して迎えている。昼日中から押入り強盗が出没する怖い世の中。こういう自衛も悲しい。

我が老を亡夫は知らずや冬椿 島 昌子

我が家も父は52歳で、母は97歳で他界しているので当然のことながら父は母の老いや老後の暮しを知らない。人の世はその繰り返して代を重ねているのだから致し方ないけれども、我が老をどこかで見守っていて欲しいという思いは解からないでもない。早咲きの赤い冬椿の美しいこと。「亡夫は知らずや」は作者の胸の内に。

初みくじ凶とは愉し浅草寺 嶋谷 宗泰

浅草寺の御神籤は昔から凶が多いのです。初みくじでも容赦なく凶がたくさん出ます。でも、作者はそのことをむしろ愉しんでいる様子。凶ぐらいでは驚かない。むしろ、大吉などが出たら落ち着かないかもしれない。

たはむれに舞ひたる落葉無垢の恋 清水 悠太

この「たはむれに舞ひたる落葉」は作者自身のことなのかかもしれない。純粹で、ひたすら舞う。それが「無垢の恋」かも。老境に入つてのラブソングで美しい。

月光や湖いつばいに鴨の水脈 首藤 久枝

〈人生に落し穴あり冬木の芽〉〈鼻の穴左右交互に春氣吸ふ〉など面白い句がある中で、掲出の句は美しい冬の月光を詠む。その月光に照らされて湖上の鴨が幾つも水脈を引いて行く。「湖いつばいに」の景の広がりが素敵。

山茶花の花の盛りは散るさかり 正田 和子

山茶花は咲いても散つても見応えのある花だ。咲きながら散り敷いている様は、振り返って見てしまうほどの魅力がある。「花の盛りは散るさかり」を人生には喻えたくない。山茶花だけの特権である。

戦後一〇〇年あれと祈るや寒卵 新海あぐり

今年は戦後八〇年。このままずっと戦争を起さず、戦争に巻き込まれないよう、戦前に帰ることなく、一〇〇年になるまで日本は戦後でいて欲しいと。寒卵を潰してはならない。

臘梅の青き空より生まれけり 杉淵真喜子

臘梅に青い空という組合せの句はたくさん在ると思う。でも、この句は臘梅がその青い空から生まれたと詠んでいて独創的である。青空から滲んでくるように咲き始めたのだ。臘梅はその名のとおり透明感があるので、そう

感じたのには無理がない。「けり」と言い切り、潔い。

稜線は冬銀河への滑走路 高橋 章子

何が滑走するかを言っていないがいいのだらう。とても夢のある句である。山のなだらかな稜線を滑走した先に冬銀河が輝く。その稜線を「冬銀河への滑走路」と見立てたユニークな発想に脱帽だ。

年明くるまづあんこ餅風習とて 高橋満利子

年の餅をどのようにして戴くかは、生れ故郷のしきたりや家庭の習慣により異なる。因みに我が家では安倍川餅で黄粉や餡をまぶすか、焼餅に醤油をつけ海苔を巻いての磯辺巻き。番外として納豆餅がある。掲出句の高橋家ではあんこ餅を戴くのが風習とか。あんこは多くの人に好まれ飽きない。いいお正月だったことでしょう。

寒卵生醤油の滴寄せ付けず 高橋美智子

寒卵を割り落とした上に生醤油を垂らす。するとどうだ、その滴を弾くではないか。鮮やかな色をして盛り上がった黄身は、まるで防水加工が施されているかのようである。それほどに新鮮な寒卵は滋養に良いとされている。「滴寄せ付けず」の的確な措辞からそれが窺える。

年暮るる一人芝居の幕が下り 竹森 美喜

幕が開くのではなく「幕が下り」という。どきつとした。「一人芝居の幕が下り」は実際にご覧になった一人芝居のことを言っているのだろうが、このように作られてみると、作者自身のこの一年のこととも思われ、不思議な気持ちになった。一人芝居は一人で何役もこなす芝居であり、それは役者でなくても、一人の人間の生き方を表わす言葉でもあるだろう。それだけ多彩な役を一人で背負い、この一年を全うした。その充実感、安堵感が「年暮るる」だと、読もうと思えば読める。深い句である。

大窓に日の出見ゆる湯女正月 田中 京

女正月で温泉にでも行かれたか。広い浴槽の大きな窓から今まさに日が上ってくる。その日の出の眩しさに触れ正月の疲れもさぞかし癒されたことだろう。女性同士の賑やかな語らいも想像できる、和やかな一句。

劈頭^{へきとう}として初雪の降りしきる 寺田 幸子

劈頭は硬い言葉だが音の響きがいい。俳句はその内容も重要だが、音の調べもまた大切。この句、一気に読み下したときの語感が心地良い。劈頭は、事の初めにという意。初雪の降る様を言っているだけの句であるが、「劈頭として」に対し「しきる」と言い切った後に些か

の空白が感じられ、印象深い句となった。

今少しのんびりとせよ初すずめ 長井 敦子

初雀と讃えられている雀であるが、厳肅でありながらどうしてどうして活発に、そこらを飛び回っている。その初雀から作者は「今少しのんびりせよ」とたしなめられている。それ程に作者も元旦から元気に動き回っているのだろう。雀はよく見ている。

鬼の豆啄む鳩の首に虹 中嶋きよし

鳩の首に虹の色を発見したのがこの句の手柄。豆撒きのあとの豆を鳩が忙しそうに啄んでいる、その首には確かに虹が広がっている。複雑に詠まず、鳩の首に焦点を当てて一句を成した。

三日はや花びら餅に目がくらみ 中村 敬子

「ダイヤモンドに目がくらみ」の「目がくらみ」である。この句、面白いのは高価なダイヤモンドではなく「花びら餅」に目がくらんだと詠んだこと。作者にとつて花びら餅はダイヤモンドより価値があるのだ。「三日はや」と、もう待つていられないのである。花びら餅は京都の銘菓。半月形の餅皮からごぼうの両端が少し出る。中の餡の紅色が仄と透け、それが春の初花を思わせて素敵。

ベッドから再起の手紙野水仙 中村 東子

入院中あるいは療養中の親しい方から手紙を戴き、その手紙には「再起」を決意していることが書かれていた。そのような内容に季語「野水仙」を取り合わせた句である。野水仙は、極寒に海岸など海の見える地に咲く花。荒波の立つ海を背に楚々と咲き、凜と咲く。

歌垣の径をたどれば黄水仙 中村 幹子

どこの歌垣なのだろう。筑波山かも知れない。筑波水仙公園に小林一茶の「水仙や垣にゆひ込むつくば山」の句碑が建っているようだが、歌垣との関連は解らない。「歌垣の径をたどれば黄水仙」はリズムが流麗で美しい。

寒紅梅もはや見納め棺出す 野沢 慶子

出棺のお見送りのときの句。寒紅梅の見納めであり、また、故人のお顔の見納めであるのかも知れない。その前の句に「容赦なくかくも冷たき身となれり」があるもので、寒い一日だったようである。寒紅梅が印象的。

佳き日のみ記憶に留む古暦 野村 雅美

昨年 of 古暦をめぐつてみると、冷や汗たらりの、思い出したくない厄日もあれば、楽しかった日も幾日がある。この句で作者は「佳き日のみ記憶に留む」と詠んでいる

が、これは賢い処世だし、前向きな生き方だと思う。

寄せ鍋の無口な夫よく語り 橋本かをる

普段の生活の中ではあまり口を利かない夫が、寄せ鍋になると不思議に打ち解けて、蘊蓄を語り始めたり軽口も叩いたりする。だから、毎晩寄せ鍋を囲めば会話が成り立つ筈だが、そもいかに。作者があれこれ世話を焼いていてくれば、夫は安心して無口で居られる。幸せな家庭を築かれた、幸せな一句である。

雪原に神の一筆書きの川 橋本 恭子

一筆書きなので、直線とは限らない。神がくねくねと一気にかいたその線が雪原を染めていく。それが川である。地球上に見られる大小の川は、いずれも神が書きになった。ロマン溢れる一句。

霜柱朝日の中の背競べ 長谷川菊男

霜柱同士が背競べをしている。朝日を浴びながら輝いている。中には背伸びしているような霜柱もいて、わいわいがやがや。見ていて飽きない。踏まればひとまりもない霜柱の小さな命と向き合った可愛い句で、作者の純粋な心、童心が句の中心に据えられている。

よそんな家の金柑含みバスを待つ 長谷部幸子

「よそのおうち」を「よそんな家」とラフな言葉で呼んでいるが、その家の庭に生る金柑を失敬した内容の句であるから（多分）、「よそんな家」というぞんざいな言い方はぴったりだ。作者は悠々とバスの来るのを待っている。

嗅覚の衰へ確か花終 畠山 奈於

終の花は小さく、上品で甘い香りがする。その香りが作者にはあまり届いていないのか「嗅覚の衰へ確か」とこの句は言う。加齢に伴う衰えは視覚聴覚だけでなく、嗅覚にも及ぶといわれているけれども、嫌な香りなら兎も角、素敵な香りまでしてこないのは困る。臘梅、紅梅、沈丁花などでもう一度確認されてはと思います。

春炬燵機嫌よき子の絵描き歌 浜田 優子

絵描き歌は、歌詞のとおりに描いていくと自然と絵が完成する遊び歌といわれている。アンパンマン、トトロ、ドラえもんなどキャラクターの絵描き歌もあって、この句の「機嫌よき子」は何を歌っているのだろう。春炬燵に温もりながら楽しい時間を過ごしているのが解かる。

究極の色は透明枯芒 原田ミチ子

枯尾花である。穂も葉も枯れはてた薄でとても佻し

い。大昔、宴会で部長課長がデュエットした「船頭小唄」の枯芒がとても佻しすぎたので、それ以来イメージが固定してしまつたが、冬の日に輝く白く呆けた景色は美しい。この句の「究極の色は透明」の透明は、その冬日に透けた枯芒の透明感を指しているのだろう。人間も究極はこう在りたいという作者の思いも感じる。

コーヒールンバ聞くは春まつ心地して 春田 千歳

世界的にヒットした「コーヒールンバ」は、日本では西田佐知子のエキゾチックな唱法で大ヒット。原曲の詞とは異なる日本語詞も面白かった。荻野目洋子のカバーを経、その後は井上陽水、工藤静香などが再カバーし、リバイバルヒットした。この歌を作者が好きだったとは。ルンバのリズムには春を待つ心を揺さぶるものが確かにある。

忘れきて花壇に冷えてゐる鉢 平野 美子

冷えた花鉢。その冷えだけに焦点を当てていて秀抜。家に持ち帰るのを忘れ、花壇にそのまま置かれている鉢なのだが、一晚経つたのだろうか、あるいは数時間のことだったのだろうか、再び手にしたときの鉢の冷えようは想像を越えていたのだ。この句を読むうちにこちらの手も冷えてきて困った。

白日の誰そ山茶花を散らかしぬ 本多 遊子

白日の下に山茶花が散っている。いや、ただ散ったのではないぞ、いったい誰が散らかしたんだ。そう思われても可笑しくはない散り方をしたのだろうこの山茶花は。「誰そ」の「そ」と、「散らかしぬ」の「ぬ」の強意がものすごく良く響き合い、一句に緊張感をもたらしている。そのことで山茶花の美しさも白日の下に表出した。

冬夕焼夢終るとぞ如是我聞 松本 直方

如是我聞は「私はこのように伝え聞いた」という意。お前の見ている夢はもう終わるのだよと聞こえてきたのがこの句。冬夕焼から伝え聞いたとも読めるが、神からの伝聞と読む方が相応しいかもしれない。冬夕焼が消えかかると同時に我が夢も消え失せてゆく。「如是我聞」の古い言葉が切なさを演出している。

トランプの強ひる関税冴ゆる風 水谷 光子

時事俳句として残して置きたい句である。国を代表する政治家を詠むのを川柳にだけに任せず、俳句で詠むことも必要。例えば虚子の弟子阿波野青畝は三十五年前の湾岸戦争のときに「寒波にも髭のフセイン意地ッ張り」と詠んだ。詠まねば収まらないのなら詠むべきで、自己満足であつてもそれを遠慮することはない。

庭下駄に朝の山茶花紅一片 持田きよえ

山茶花は散つても綺麗。庭下駄の上に乗っているだけの景であるが「紅一片」の描写で俄然、趣が出てきた。この句もシンプルに作られていて、座五に紅一片を置いたことで余情が生まれた。

絨緞を舐めむばかりに鑑識課 森尻 禮子

この前の句に「悴みて家探し被害届書く」がある。泥棒に入られたのだろうと憶測した。掲出の句の鑑識課の職員が「絨緞を舐めむばかり」に調べているところは、テレビドラマを彷彿させてリアルだ。絨緞は冬の季語。被害に遭つても、さすがに俳人の目は鋭い。

寒柝や慈しむ者あればこそ 山田 径子

火の用心と声に出しながら寒柝を叩く年末の防災パトロールに参加したことがある。火事は怖い。冬季は殊に乾燥しているので火の回りが早い。寒柝の音が聞こえることで失火が少しでも防げれば何より。小火を出した喫茶店の前で再度「火の用心」と声を上げたこともあった。これも「慈しむ者あればこそ」である。納得の一句。

霜の葉の真紅むらさき絹の道 山田 雅子

この絹の道は、八王子周辺の道を想像した。その絹の

道を歩いていたら、葉に霜が降りているのを発見したという。真紅の色の葉もあれば紫の色の葉もあり、作者は楽しくこれらに見入ったことだろう。この句は「真紅むらさき絹の道」の表記、調べが抜群にいい。更に「しんく・むらさき・きぬのみち」から絹の色まで見えて来る。巧く計算されつつ、抒情に満ちた句に仕上がっている。

日脚伸ぶ遺品のスイカで何処行かむ 横須賀智子

このスイカは言うまでもなく、駅の改札口で使うあのスイカであり、作者の夫君が遺されたものだ。私の母もこのスイカを遺して逝ったので、この句は我がことのように読んだ。「何処行かむ」には、遺されたこの残高も解らないようなスイカで故人の面影と一緒に小旅行を楽しもう、それが功德だと思う作者の気持ちが籠められていよう。日脚が伸び、直ぐにも実現しそうである。

家中に手摺をつけて春来る 和田 郁子

要介護あるいは将来の介護に供えて手摺を張り巡らせている家を想う。家の中で転ぶことも多いので、生活空間である浴室、トイレ、廊下、自室などにも取り付けて安全を確保。「春来る」により万端整ったことが解かる。今回の作品の筆致はどの句も確りしている。就中へすみれ草娘まだまだ化粧下手へには諧謔と母の愛がある。

最新号 令和6年11月発行

『俳句文学館紀要第23号』

近代以降の国内・海外の俳句を研究対象とした、研究者必携の論文集。

―掲載内容―

「仰臥漫録」における俳句の構造……………大槻 千紘
内藤鳴雪の俳句観とその変遷……………桜 もとゐ

山口誓子と四日市……………米田 恵子

―「この町を愛せば驛の土堤青む」―

資料紹介

明治二十七年秋・仙台時代の虚子……………浅川 芳直

―二高「尚志会雑誌」掲載の文学論並びに句稿―

第九回新鋭評論賞

日野草城の「戦火想望」……………渡部有紀子

第十回新鋭評論賞

加藤知世子論―俳句という光……………吉川 千早

定価 本体1,500円 送料 300円

振替 00160021273

申込先 〒169-8521 東京都新宿区百人町3―28―10

公益社団法人俳人協会 紀要第23号係